ガーナでそろばんプロジェクト 105 号（2023 年 2 月 28 日）

★★　SDGs の目標に囚われることより自分の信念を貫くことが大切　★★

「誰一人取り残さない」この言葉を初めてこのそろばん報告書に書いたのは、９０号（２０２１年２月１３日）でした。国連が２０３０年のゴールを目指して掲げた SDGs の言葉で、その時に私は、授業でそろばんを取り入れるからには全ての子どもにそろばんの計算力を身につけさせたいと高い目標を立てました。それから一年経ち、あるSNSに私がガーナで行なっているこの取り組みに関して「誰一人取り残さない取り組みをどのように考えているのか？」と書き込みがあり、当時たいへん堪えたことを９９号で書いています。その最後の文に「各々が未来の扉を開けるお手伝いをする役目が私で、これまで築き上げてきたこと、今やっている取り組みはぶれずに自信を持って未来への軌跡に相応しくやっていく。」と書いています。そして、またこれから一年が経ち、今「全ての子どもにそろばんの計算力を身につけさせたい」という高い目標は、指導する側も指導される側（つまりは子ども）も気持ちが同じでないと全ての子どもに計算力を身につけさせることは非常に難しいと白旗を揚げてしまいそうな気力の日々が続いているのです。この白旗はSNSで書き込みをした彼女へ対してのものではなく、決して弱音を吐くものではないけれど、決して私はガーナの先生のように生徒が間違えたら直ぐに木の棒で叩いたりはしないけれど、大人数でのそろばんと算数の授業に困ばいはしないけれど、一部の子どもの態度に「なぜなの？」と怒りたい気持ちなのか悲しい気持ちなのか？手ごたえを感じない授業に疲れてしまうのです。これは時々書いていた〝ただその時間を座って過ごすだけの生徒〟にです。日本の小中学校の先生はこうした生徒に対してどのように対応しているのだろうと思う事もあります。ガーナは落第制があるのですが私から見るとおそらくこの生徒は落第していてもおかしくはなく、正直、新学年度が始まった1月に6年生の教室にいたので進級できたんだと思ったほどです。先日、この6年生で虫食い計算をした時の事、黒板に虫食い計算を書き始めた際に「やり方を説明するから、まだノートに書かないよ。手も挙げない。」と説明すると大半の生徒は返事をし、手を止め黒板に目を留めるのに、その生徒一人だけニヤニヤしながら手を挙げたので「何？」と語尾を荒げ言ってしまいました。これまでも、毎度毎回手は揚げるけれど、いざ指名するも最初から何も考えていないので何もできずに終わってしまうのです。今回の私の「何？」は心が冷たく指導者として取ってはいけない態度なのです。大人のこうした態度を子どもは真似ます。瞬時に自分の態度を反省するも、しばらくしてその生徒に目をやるとどこから持ってきたのか？大きなホチキスの芯を入れる部分をカツカツと机に叩いているのでした。「何やっているの？今算数だよね？」再び声を荒げて自分がいました。「誰一人取り残さない」なんて「こんな子は取り残されてしまうんだよ。」そう冷たく思う自分が現れます。SDGs の開発目標の言葉なんて考えないで行こう。そろばんの計算力を身につけさせることは大前提で授業を行っていこうと思います。まさに十がわかる喜びです。

　１年前の SNS で私に向けられた書き込みにはこんな言葉もありました。「未来の事を考えて指導しているのか？」海外で無料でそろばんを指導している私に対して文字による攻撃は当時の私をかなり堪えさせましたが「未来のこと」これは前号で触れましたが、当時そろばん教室に通っていた生徒が学ぶことを知り大学へ進学したり、高校卒業認定試験に優秀な成績を収め、今学校の中学部の教員をしている元生徒が「直ぐに結果が出ない教育」の未来を証明してくれました。SDGs の開発目標の言葉に囚われるのを止め、誰に批判されてもぶれずに自分の信念を貫いていくことが私には大切なことなのです。

報告　TOSHIKO

協賛

トモエそろばん様